

## 病院長挨拶

病院長 島田 眞路



大学病院の医師の使命とは何でしょうか？

それは研究、教育、診療といわれています。問題はその順番です。「大学」としてはこの順でしょう。しかし「病院」としては逆で診療、教育、研究となります。

昨今の地方大学の現況を眺めてみますと、「病院」として機能させるために診療で手一杯となり、「大学」としての役割を十分に果たせないでいるのではないのでしょうか？つまり研究がおろそかになってきているのが危惧されます。

大学の改革に関しては、大学院大学(大学院部局化)、大学統合、独立行政法人化と進みました。大学院大学では研究者は全員七帝大のある都会へ集合！という形で地方からまず研究者の卵がいなくなりま

した。最も大打撃を被ったのが卒後臨床研修制度で、研修医も大都市の病院へ集合！ということで、地方大学の研修医もいなくなりました。これは山梨大学も例外ではありません。

医学部定員増や地域卒などで何とか研修医を地方にとどめようとしていますが、効果が現れるのは少なくとも数年先、優秀な医師の育成ということだと10年先になり、さらに問題なのは、医師の確保に気をとられるあまり、大学の本来の使命である研究の価値が下がり、それでよしとする風潮ではないでしょうか？これが続くと大学再編の波にのまれ文科省からオタクは研究レベルが低いので研究大学ではなく、教育大学でどうでしょうなどと肩タタキをされ、あげくのはては指導を受けるかも知れません。

何とかこの風潮を阻止し、元気に研究、診療、教育に頑張っていこうではありませんか！

## 病院機能評価受審にあたって

副病院長 久木山 清貴



「こんな大変な苦勞をして何のために病院機能評価を受けるのか」とよく聞かれます。病院は常に改善していかなければ、停滞し日進月歩の医療の進歩に立ち遅れレベルの高い診療サービス提供に支障が出てくることは誰にも想像できると思います。質の高い医療を効率的に提供するために、常に多くの努力が払われていると思います。

こうした努力をさらに効果的なものとするためには、現状を自己評価するとともに第三者による評価を導入する必要があると思われます。自己評価ではどうしても甘くなったり偏ったりしますが、日本医療機能評価機構による評価を受けることによって、病院の改善すべき点を客観的に把握するとともに改善に向けた方策も示していただけます。また、評価を受けるために具体的な改善目標を設定することなどの準備すること自体が改善のきっかけにもなります。さらに第三者から指摘されることにより、問題点について現場で働く職員が共通した認識を持つことができ、各部門

の職員の改善意欲が向上して、主体的な取り組みが期待できることが重要であると考えています。管理者などの上から指示されるよりも、第三者からの指示の方が現場で働く職員にとっては受け入れやすいということもあります。

今回の機能評価ですが、今年12月にサーベイヤーを受け入れ評価をしていただくスケジュールになっています。その準備として医師、看護部、事務職員を構成メンバーとする病院評価ワーキングを昨年立ち上げ自己評価を含む問題点の洗い出しと解決方法に関する協議を行ってまいりました。本年度に入り、さらに7つの領域ワーキングに分け対応策を練っていただいております。7月上旬には病院機能評価に関する講演会を開催することができました。全職員に評価受け入れの準備に関わっていただいておりますが、病院を少しでも良くしようという気持ちを持っていただくことが機能評価のクリアーに繋がると思っております。皆様方のご理解とご協力を是非ともお願い申し上げます。

## 卒後臨床研修センターから

副病院長 藤井 秀樹



平成22年度の研修プログラムが大幅に改訂されました。すなわち、研修1年目は内科(6ヵ月)と救急(3ヵ月)、2年目は地域医療(1ヵ月)というものです。この改訂で厚労省の意図するところと問題点は前回の「はなみずき」で述べましたが、センターでは逆に、これを機会によりプログラムに柔軟性を持たせました。産婦人科ならびに小児科の重点コースに加え、外科系ならびに内科系の専門コースを設定しました。このコラムを書いている時点では未だ厚労省の認可はおりていませんが、まじめに「良い医師」になることを望んで研修に取り組もうとしている医師の

卵たちが魅力を感じてくれるプログラムができたのではないかと考えています。

このようにソフトの改善には努力を積み重ねていますが、諸事情によりハード面での改善は滞っているのが現状です。シミュレーションセンターの設置、研修医室のよりよい環境整備が望まれますが実現困難な状況です。例をあげれば、本来、研修医各個人に机が必要ですし、現在貸与されているロッカーは十分なサイズではありません。しかし、研修医が最も時間を費やすのは病棟であり各科の医局です。関係各位には、研修医がより良い環境で実のある研修ができますようにさらなるご尽力とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 退職挨拶

前事務部長 有井 博文



平成19年1月1日付けで事務部長に就任以来、2年7ヵ月間勤務させていただき、このたび本年7月末日をもって退職いたしました。

昭和43年4月に旧山梨大学に採用以来、41年4ヵ月という人生の半分以上(途中4年ほど国立天文台ハワイ観測所及び木更津高専に勤務)を山梨大学に勤務し、変遷を見てまいりました。

この間、微力ではありましたが、自分なりに精一杯努めてまいりました。これまで多くの上司、同僚、後輩そして先生方にお世話になりました。元来、性格がアバウトでせっかちということもあり、それぞれの局面において、多くの皆様にご迷惑をお掛けしましたこと、この紙面をおかりしてお詫び申し上げます。山梨大学は、「地域の中核世界の人

材」を、また、医学部附属病院は「一人ひとりが満足できる病院」をスローガンに教育・研究・診療にその使命を果たしています。地方大学だからではなく、地方にしかできないこともあります。是非、他の大学に負けない基盤を整備し、躍進されることを願っております。附属病院は、これから病院再開発が控えています。県内唯一の国立大学病院「最後の砦」としての機能的で高度な医療が提供できる病院再開発を願っております。

本学そして本院のより一層の発展を祈念し、退職のあいさつとさせていただきます。本当にありがとうございます。

今は、ほっとした気持ちで一杯です。今後、附属病院にお世話になることもあるかもしれませんが、その節はどうかよろしく願います。

## 着任挨拶

事務部長 白沢 一男



本年8月1日付けで有井事務部長の後任として、事務部長を拝命しました白沢一男です。有田医学部長、島田病院長を側面から補佐するという重責を担うということになり、身の引き締まる思いをしております。

私は、昭和56年創設直後の山梨医科大学に転任し、以来附属病院開院から山梨大学との統合までの約22年間お世話になり、統合後の企画課補佐、会計課長、企画・評価課長を経て、この度就任しました。

これまでの事務部長に比べ、何分にも若輩者であり、約7年振りの医学部キャンパスということで、戸惑っているところですが、馴染みの皆さんに久しぶりにお会いし、声を掛けていただく度に勇気付けられているこの頃です。

本学は、4月に貫井学長の後を受け、前田新学長が就任され、

新学長・理事のもとで第二期の中期計画の素案を策定し、来年度は、いよいよ第二期のスタートです。そうした意味からも今年が節目に当たる年であり、10年、20年先の山梨大学を見据えて、全職員が一丸となって改革に取り組んでいかなければなりません。

医学部においても、医師確保対策としての医学部入学定員増への対応、長年の懸案である新病棟建設構想、さらにNICUの設置、また、今年度は5年振りの病院機能評価受審など課題が山積しております。

こうした中で、事務部が果たす役割は極めて重要であり、前向きに取り組むことにより、必ずや諸問題を解決し、山を乗り越えられると確信しております。そのためにも様々なご意見に耳を傾けることが重要であると痛感しておりますので、今後ともご指導賜りますようよろしくお願いいたします。

# 外来患者満足度調査の実施結果

## 患者サービス推進委員会

本院では、現在の患者さんの実態や本院への評価・満足度を継続的に把握し、その問題点の改善や満足度の向上に役立てることを目的として、平成20年度も外来患者満足度調査を実施しました。

その結果、診察サービス面の、特に診察、検査、支払いの待ち時間に不満を持たれている患者さんの実態を再認識しました。

本委員会では、この結果を率直に受け止め、待ち時間の短縮あるいは苦痛軽減に向け検討しているところであります。外来患者さんが増加している今日、非常に難しい問題ではありますが、各部署とも、診療開始時刻の厳守等、少しでも改善できるよう、ご努力いただきたいと思えます。

なお、改善のご提案等委員会までご連絡ください。

- ・調査期間：平成21年2月23日・24日
- ・回答者数：688人（1,000人配布）

		(%)					インデックス (100点満点)
		非常に満足	満足	どちらとも いえない	やや不満	不満	
施設面	交通の利便さ	10.5	43.0	31.8	8.8	6.0	60.8
	駐車場の広さや入りやすさ	9.1	45.2	22.1	18.8	4.8	58.7
	建物の外観やつくり	6.0	44.8	42.2	5.8	1.4	62.1
	総合待合の設備や雰囲気	6.9	49.8	36.0	5.9	1.4	63.8
	各科の待合の設備や雰囲気	7.0	43.1	38.7	9.4	1.7	61.0
	トイレや洗面所設備	10.1	49.4	28.1	9.9	2.6	63.6
	売店や自動販売機	7.1	52.8	31.0	8.0	1.1	64.2
	食堂	8.7	46.2	37.0	5.8	2.3	63.3
	案内看板や表示のわかりやすさ	6.8	47.4	35.1	8.0	2.6	61.9
	院内の移動のしやすさ	5.2	39.1	42.6	11.1	2.1	58.6
	清潔感	11.0	52.6	28.8	6.4	1.4	66.4
	施設面全般について	5.7	53.1	34.8	5.5	0.9	64.3
接遇面	診療受付（初診・再診）の対応	15.9	58.1	18.0	5.8	2.4	69.9
	会計の対応	12.5	55.6	22.9	7.5	1.5	67.5
	各科診療受付の対応	13.8	57.2	23.3	4.8	0.9	69.6
	看護師の言葉使いや態度	19.8	59.6	17.2	2.2	1.2	73.6
	医師の言葉使いや態度	27.1	55.6	14.5	2.0	0.8	76.5
	検査・放射線技師の言葉使いや態度	20.8	56.7	20.8	1.5	0.2	74.1
	プラシマへの配慮	19.2	58.5	19.4	2.3	0.7	73.3
	接遇面全般について	13.8	60.4	24.2	1.0	0.5	71.5
診察サービス面	診察待ち時間	5.8	23.0	35.1	23.2	12.9	46.4
	検査の待ち時間	6.9	32.2	40.4	13.8	6.7	54.7
	診察時間	9.2	44.8	36.7	5.9	3.5	62.6
	診察後の支払いまでの待ち時間	7.0	35.8	35.8	16.0	5.3	55.8
	看護師の説明のわかりやすさ	13.0	54.8	28.0	2.7	1.5	68.8
	医師の病状や検査結果の説明	21.2	52.8	20.3	3.9	1.7	72.0
	医師への質問や相談のしやすさ	18.7	51.2	23.1	5.0	2.1	69.9
	診察科でのサービス全般について	12.1	53.5	29.8	3.5	1.1	68.0

\*インデックスは、非常に満足（100点）、満足（75点）、どちらともいえない（50点）、やや不満（25点）、不満（0点）の合計点

## 富士山八合目救護所ボランティア参加

### 人事課補佐 古守 和子

山積みの物資と10班4人を載せたブルドーザーがガタピシと轟音を立てながら急坂を登ること2時間、8月4日午前8時50分、富士山八合目救護所に降り立ちました。板張りの診療室は昨年よりまたいっそう整備され、バージョンアップされた備品類からは、より良き診療環境とサバイバルな中にも快適な3日間を提供しようとする担当者各位のご苦労が偲ばれて熱くなるものがありました。

私の参加の理由は、患者ではない立場で医療の現場を見てみたいという不屈きなものだったのですが、ドクターやドクターの卵さんたちの診療に対する真摯な姿勢には毎回感動を覚えます。無謀とも思える登山の拳句、高山病にかかって転がり込む患者さんの、「すみませーん」のか細い声に、小さなベッドの仮眠から飛び起きて丁寧に対応する姿、また、重篤な事態にあれで良かったのだろうか、こうした方が良かったのでは、とあれこれ考える姿等々。

そんな思いは露知らず、件の患者さんたちはあっけらかんと、「募金を」の文字には目もくれず診療所を後にします。なんとも口惜しいのですが、これが富士山の富士山たる所以でしょうか。

これら感動と美しい日の出、夜景に会いにまた来年も、と願っています。



左から、本学卒業生鈴木恵子医師（虎ノ門病院）とお母様、古守補佐、富士吉田市立病院宮下宣幸看護師

## トリアージ訓練について

防災・災害対策室長 松田 兼一



皆さんこんにちは、防災・災害対策室の松田です。本年7月18日に行いましたトリアージ訓練についてご報告申し上げます。

本年は新型インフルエンザの関係で外部からはご参加いただきませんが、学内から197名、医学科・看護科学生が198名と、総勢395名となりました。多くの方にご参加いただき、実践さながらの訓練ができました。参加して頂いた皆様に対して本誌面をお借りして厚く御礼を申し上げます。

今回のトリアージ訓練の特徴は、地域救護所の設置と炊き出しでした。看護科の皆様また栄養管理部の皆様ありがとうございました。また傷病者役の方に例年以上の役割をお願いしたことも新しい試みでした。治療に対して大声で文句を言うてもらうのは当然のこと、治療後に親戚や友人の所

在を尋ねてもらったり、家族控え室で連れてきた傷病者の容体をしつこく尋ねてもらいました。また治療後に避難場所について相談をもちかけたり、子供のミルクを作る水場を相談したり、治療中にお金を払わず逃げてもらったりもしました。院内の通信設備が破綻した設定にもかかわらず、本年も昨年同様、非常にスムーズにトリアージ及び治療を行うことができました。ありがとうございました。今回の訓練で明らかになったことは、やはり情報伝達及び共有の困難さとボランティアの有用性でした。またトリアージタッグの適正使用の困難さも浮き彫りになりました。

来年は今年できなかったことを反省するとともに、周りの病院職員や市町村を巻き込んで地域連携強化をテーマに実施したいと思います。今回同様多数ご参加いただければ幸いです。よろしくお願ひ申し上げます。



玄関でのトリアージ



黄色ゾーンの様子



栄養管理部による炊き出し

## 5 大学連携 ―キックオフミーティング開催―

医師キャリア形成センター 准教授 板倉 淳



文部科学省が進める大学病院連携型高度医療人養成推進事業として、本院主幹で採択された5大学連携（山梨、浜松、北里、昭和、聖マリ）の事業代表者会議（キックオフミーティング）が、専修医登録システムの完成を受けて、さる7月26日東京田町のキャンパスイノベーションセンターで開催されました。各大学病院長、医師キャリア形成センター長、キャリアコーディネーター、事務担当者出席し、本院からは主幹大学として、平田（産婦人科）、杉山（整形外科）、佐藤（第1内科）、鈴木（第2外科）の4名のプログラムマネージャーと5名の臨床研修医の参加も頂きました。この事業の根幹が5大学間の人的交流であるとの認識から、今回の会合を早くから計画しておりました。諸事情によりこの時期に

なってしまったことは残念でありましたが、お互いに本事業に対する協力体制をあらためて確認できたことで、ようやくスタートラインに立てた気がします。今後は、各大学で専修医登録に向けた説明会とプログラムマネージャーへの啓蒙活動を展開し、活発な交流と開かれた教育・研修環境の構築を進めていきたいと考えています。

ちなみに会合後に開かれた懇親会では、前田学長差し入れの山梨大学ワインが振る舞われ、ご好評をいただき、ワイン目当ての交流を約束される先生もおられ、ひとつの起爆剤にもなったかと考えています。

まだ形の見えないプロジェクトではありますが、長い目で見た今後の大学病院の役割と形を構築していく重要な事業と考えますので、多くの方々のご理解とご協力をお願い致します。



平成21年4月1日より、岩下前 GRM（現副看護部長）の後任として、武田室長、村松副師長とともに安全管理を担当させていただいています。今年度から GRM が2人になり、充実した新しい体制であることを考え、その責任を重く感じております。GRM が2人になったからこそ、できるだけ現場に足を運び何が起きたのか、なぜ起きたのか、そしてその中から再発予防のための方法を一緒に考えていきたいと思っております。

今年度から本院も7対1看護配置を算定しています。その為、どの病棟にも多くの新人看護師さんが配属されました。そんな“新人さん”と一緒に「病院は楽しい」と感じられるような仕事をしていきたいと思っております。その為、“新人さん”がインシデントを起こさないように、先輩たちのちょっとした声かけが大切です。

今年度の安全強化月間・6月の重点目標は、安全確認のためのコミュニケーションの実践でした。“新人さん”を含め、一緒に仕事をする仲間同士が、わからないこと、疑問に思ったこ

と、ちょっとした「あれ?」「これでいいの?」を言葉にして確認することがインシデントを引き起こさないためには必要だと思います。インシデントの原因の多くにコミュニケーション不足があがることも事実です。“新人さん”は「不安なこと」は躊躇しないで先輩に聞いてみてください。そして先輩は、“新人さん”が「不安全な行動」を見かけたら声をかけてあげてください。そして、そんなコミュニケーションの中から「安全な行動」がとれるようにお願いします。

そしてもうひとつ大切なことは「安全な状態」です。「不安全な状態」の中にもインシデントは潜んでいます。「安全な状態」を保つために、5Sの実践も大切です。5Sとは、皆さんも知っている「整理・整頓・清掃・清潔・躰」のことです。皆さんの職場環境はいかがですか。今年度システムの変更に伴い、職場の環境が変化したところも多いのではないかと思います。みんなで働きやすい環境づくりをお願いします。

今年度も、「病院全体がひとつのチーム」を目標に、基本を大切にされた新人教育と医療の実践をお願いします。

## 「納涼花火大会」の開催について

総務課 総務・研究協力グループリーダー 小林 充

ずいぶん前に梅雨は明けたはずなのに、毎日のようにどんよりとした日々が続き、前日の天気予報は、ずばり「雨」。担当者として5年目にして初めての延期も覚悟しましたが、そんな心配を一気に晴らすかのような夏空に恵まれ、7月23日、「附属病院納涼花火大会」は開催されました。

日中の暑さから開放され、久しぶりの心地よい涼風の中、参加された患者さんたちも老若男女を問わず、輪投げや射的、ヨーヨー釣りなど

のゲームを楽しんでいました。メインイベントの「打上げ花火」は、会場内はもちろん、病室から窓越しに観賞されていた多くの患者さんをも魅了し、夏の夜空を彩りました。

絶好の花火日和に感謝し、お手伝いいただいた教職員及び学生ボランティアサークル「サニースマイル」の皆様、後援していただいた「里仁会」様に心より御礼申し上げます。

短い夏、暑さに負けず、希望の花を咲かせましょう。



左から、市川総務課長、島田病院院長、鈴木看護部長



楽しいヨーヨー釣り



圧巻のナイアガラ

## 1 日看護師を体験して

甲府南高校 3年 遠藤 美奈

今回看護師体験に参加して、学校では学べない多くのことをたくさん学びました。私は主に患者さんとの対話を体験させていただき、お話の中で患者さんは「看護師さんの何気ない一言にとても勇気づけられる。感謝している。」とおっしゃっていました。また、指導して下さった看護師さんが「様々な人の人生にかかわることが出来るやりがいのある仕事ですよ。」と教えてくれました。このように多くの人に感謝してもらえたり、やりがいがあると感じる事ができる看護師という仕事は、とても素敵な仕事だと思います。

看護師さんは同じ廊下を何度も何度も往復してい

て、想像以上に忙しそうでした。けれど、全く疲れた様子はなく、患者さんやお医者さんと明るく話しをしていて、見ていて元気がもらえました。看護師さんにとって薬の名前を覚えることも大切だけど、1番大切なのは心と心のコミュニケーションをとることなんだと感じました。

お忙しい中、時間を割いていただき、ありがとうございました。この体験で学んだことを進路選択に活かしていきたいと思っています。



座談会で師長からの講評

甲府南高校 3年 土橋 滯

私が今回一日看護師体験に参加したのは、医療・看護の仕事に興味があり、詳しく知りたかったからです。看護師さんについて仕事を見学することで、今まで知らなかった「生の現場」を見ることができました。

しかし、最初は何をしいのか分からず、ただ



病棟でのミーティング

看護師さんの後をついていくという状態でした。その中で、看護師さんが明るく、笑顔で患者さんと接していくのを見るうちに、私の心も少しずつほぐれていきま

した。そして、患者さんと話すこともできて、コミュニケーションがとれるようになりました。このとき、看護師さんの笑顔の大切さを学びました。

今回体験に参加することで、看護の仕事は、とても大変だけれど、感謝され、やりがいのあることであると、改めて感じました。今回体験したことによって、ますます医療・看護の仕事に興味がわき、私の進路を考えるうえでとても大きなきっかけになりました。一日看護師体験に参加して良かったです。このような体験をさせていただきありがとうございました。

## 「看護学科との懇談会」について

看護部 副看護部長 新田 妙子



本年5月7日、本学看護学科と附属病院職員との懇談会を開催しました。

島田病院長をはじめ各診療科長、看護学科教員、先輩看護師そして51名の学生が参加しました。この懇談会は一昨年度から実施しており、今回で3回目です。

懇談会は、本学看護学科学生に本院の診療や看護の魅力をも十分に理解してもらい、本院への就職につなげたいという目的から実施しています。この取り組みが功を奏し、今年は27名の就職に結びつきました。

学生は日頃の臨床実習で本院との関わりが深いという面はあります。しかし、実習現場では看護や診療科の特徴を十分伝えることは



島田病院長

できません。懇談会は普段伝えていること以上のチーム医療の実際や一緒に働きたいという思いを伝える場となりました。

病院長はじめ各診療科長はユーモア満載のプレゼンテーションで山梨県の良いところ、山梨大学の魅力や診療科の特徴、最初の就職場所は相談できる人たちの元でスタートすることでストレスを乗り越えられることなどを伝えました。会場は何回も笑いの渦でなごみました。

鈴木看護部長は本院看護部の教育体制・福利厚生そして学生に期待することを話しました。学生は誰もが看護部長の熱い語りに、じっと聴き入っていました。看護部長の「看護師になって最初の3年間をどこで働くかということがとても大切です。これが看護師としてのその後の人生に大きく影響を及ぼします」という言葉は、教育に力を入れている看護部の誇りを全員に強く伝えるものでした。



鈴木看護部長



平田准教授を囲んで

## 怖い受動喫煙

副病院長 久木山 清貴



ホタル族という言葉があります。夜にマンションのベランダで喫煙している様子を隣のマンションから眺めてみて表現されたもので流行語にもなりました。受動喫煙が家族に与える悪影響が徐々に世間にも知られるようになり家庭内分煙が始まった10年ぐらい前の現象でした。

その後、2003年に健康増進法25条の受動喫煙防止法が制定され、欧米に比べてかなり遅れましたが徐々に公共的建物内での禁煙化へと進んでいったのは皆さんご存知の通りです。喫煙者の夫をもつ非喫煙者の女性は、夫が喫煙者でない場合に比べて約2倍肺癌になりやすいことは有名な事実です。特に肺の奥にできる肺腺癌になることが多いのです。これは受動喫煙の場合、副流煙を吸うことが多いわけですが、これには肺の奥まで届く発がん性の微小粒子状物質が多く含まれるからであると説明されています。実際に肺腺癌の多くは女性に発症しており、全体の4割は受動喫煙が原因であることがわかっています。喫煙者に発症しやすいその他の癌の発生率も受動喫煙者で高くなっています。副流煙には本人が吸う主流煙よりも高い濃度で発がん物質やその他の有害物質を含んでいます。受動喫煙は単なるタバコ臭いとかいう嫌悪感ではなく非喫煙者が発ガン物質を含む有害物質を避けられずに吸わされているということに問題があるわけです。これまでの簡単な分煙化はほ

とんど役に立たないことが明らかでした。レストラン等で禁煙エリアと喫煙エリアを設けて分煙しているのはほとんど意味がありません。ちょうど幼児用プール内で半分を区切っておしっこ許可区域と禁止区域としているようなものです。2年前までの中央本線のあずさ・かいじの喫煙車両による分煙もひどいものでした。喫煙車とのドアが開くたびにタバコの煙が一瞬にして禁煙車両に流れ込むために喫煙者の隣の禁煙車両内ではほとんど喫煙車両と同等の喫煙で充満していました。

また、喫煙者は喫煙後にも呼気から約5分間はタバコの煙を排出し続けますので、いくらベランダで分煙しても喫煙後直ぐに茶の間に戻ってくると家族に受動喫煙のリスクを与えることとなります。さらに、タバコの煙の粉塵は喫煙者の衣服や住居環境にも一旦吸収されその後徐々に放出され家族を含め周囲の人々に受動喫煙による害を与え続けることとなります。その点、職場における最近の厳密な分煙化や全面禁煙化の方向性は喜ばしいことです。

本年6月に厚労省研究班から国民の喫煙率調査報告が新聞の全国紙上に発表されました。残念ながら40才以上の男性中高年者において山梨県は全国で1位の高喫煙率(37.9%)でした。喫煙者を減らすことは言うまでもありませんが、受動喫煙の怖さを喫煙者に充分認識して協力してもらうことで分煙の厳密化を徹底するか全面禁煙化の方向性にもっていく必要があります。



平成21年6月9日、附属病院外来診療棟の中庭の池にカルガモの親子とヒナ6羽が泳いでいるのが発見されました。

カルガモ親子が元気で水面を泳いでいる姿は愛嬌たっぷり、患者さん達に「安らぎ」を与えています。

昨年もヒナが生まれましたが残念ながら成長するには至りませんでした。今年は何とか親子とも飛び立つように、前田学長及び貫井前学長自ら先頭に立ち、カモとカメの生活ゾーン分け、側溝に人工芝を敷きヒナの側溝への落下防止など環境づくりを行いました。タイトル写真は平成21年7月28日現在の写真であり、親と見分けがつかないくら



6月9日の様子

い大きくなり、後は翼が生えそろうのを待つだけです。ヒナの成長を期待して、いろんな方々に協力をいただきありがとうございました。特に栄養管理部からは、野菜などの餌をいただき、また病院警備担当の渡辺さんは、忙しい合間をぬっての給餌や、見回りをしていただきました。皆様9月号のはなみずきを読まれる頃には親子7羽が無事に飛び立っていることと思います。

また、『ホタル作戦』についても環境保全を継続して行っています。今年も5月初旬～6月中旬まで舞っており、15匹程の《癒しの光》を入院患者さん達にも観てもらうことができました。



観賞会(5月22日)

## 緩和ケア研修会について

医療チームセンター長 飯嶋 哲也

去る5月30日、31日の2日間にわたり看護学科教育研究棟を会場に平成21年度第1回山梨県緩和ケア研修会を開催いたしました。この研修会は日本緩和医療学会の「医師に対する緩和ケア教育プログラム」に準拠し、緩和ケアの基礎知識普及を目的とした研修会です。合計12時間以上のプログラム中に2回のロールプレイ、2回のグループワーク発表が含まれている参加型研修会であることが最も大きな特色です。今回は、医師30名（本学15名）、看護師7名（本学5名）、薬剤師3名（本学1名、2名は星薬科大学大学院からの研修生）に参加していただきました。病状説明のロールプレイの感想

として看護師の皆様が、「主治医の先生方もつらいのだな、ということが改めて実感された。」との感想を異口同音におっしゃっていたことが印象的でした。来年度も同時期に開催予定です。本年度は10月3日、4日に富士吉田市立病院、10月24日、25日に市立甲府病院で開催予定です。奮ってご参加いただけるようお願い申し上げます。



グループワーク発表風景

## ヴァンフォーレの小児病棟訪問について

小児科 講師 犬飼 岳史

サッカーJリーグのヴァンフォーレ甲府との7回目の交流会が、6月9日に松橋優、國吉貴博、唐澤大夢の3選手とチーム・マスコットのヴァン君を迎えて行われました。

プレイ・ルームで子供たちの質問に答えていただきましたが、子供たちの歓声が年を追うごとに熱を帯びてきており、地域に密着したクラブ作りが実感されました。リフティングの披露は國吉選手でしたが、直後の熊本戦に途中出



松橋、國吉、唐澤の各選手

場しリーグ戦初ゴールを決めたのは、子供たちの歓声が後押ししたのだと思います。握手やサインをしていただき一緒に写真を撮った後は、プレイ・ルームに出てこれられない子供たちを訪室していただき楽しい時間を過ごしました。

最後にJ1復帰に向けて益々の活躍を祈念するとともに、開催にご尽力下さった関係者の方々に御礼申し上げます。



ヴァン君と広報（ヴァン君通訳）の植松さん

## 「七タコンサート」の開催について

総務課

総務・研究協力グループリーダー 小林 充

6月25日午後6時30分から、「附属病院七タコンサート」が開催されました。七夕には少々早い日程でしたが、色とりどりの短冊と吹流しで、会場は七夕らしい雰囲気になりました。

コンサートは、パルフェの皆さんによるアカペラの美しいハーモニーで始まり、患者さんのお子さんと一緒にアニメソングを合唱するなど、楽しい演奏を披露していただきました。また、4階西病棟ハンドベル部の皆さんには、息の合っ



かわいい飛び入り参加！  
“ぼによ”を上手に歌いました

たハンドベルの演奏を、また、医学部学生オーケストラの皆さんには木管・金管・弦楽器のパートごとの演奏に加え、最後は全員で迫力あるオーケストラの演奏を披露していただき、患者さんも大いに楽しんでいただけたのではないかと思います。

演奏者の皆様、ご来場の皆様、そしてお手伝いいただいた関係者の皆様、ありがとうございました。

患者さんから寄せられた短冊はおよそ300枚。皆様の願い事が叶いますように☆☆☆



4階西病棟  
ハンドベル部